比治山大学紀要　第二十七号　二〇二〇

天正十年羽柴秀吉書状にみられる安国寺恵瓊

――安国寺恵瓊関係資料データベース資料稿（二）――

Ankokuji Ekei Shown in Letter of Hashiba Hideyoshi in 1582

―The Second Draft on Collected Documents in Ankokuji Ekei Related Materials Database―

山﨑　真克・麻生　由紀・土居裕美子・迫垣内　裕・頼　祺一
YAMAZAKI Masakatsu, ASOH Yuki, DOI Yumiko,
SAKOGAICHI Yutaka and RAI Kiichi

平成二十八（二〇一六）年度四月より、比治山大学研究助成を受け、「不動院と安国寺恵瓊に関する研究」を開始した。本研究は、不動院中興の祖とされる安国寺恵瓊に注目し、「不動院文書」の中にみられる恵瓊関係の書状をはじめとした関連資料、および全国に点在する恵瓊関係資料の調査・収集・解読・整理を行うことにより、十六世紀後半における日本の歴史の中で、特に不動院との関わりに焦点を当てつつ、安国寺恵瓊が果たした役割を明らかにすることを最終目的とする。

平成二十九（二〇一七）年度から令和二（二〇二〇）年度にかけて、「安国寺恵瓊関係資料データベースシステム」の構築に向け、恵瓊関係資料の調査・収集・整理を継続的に行った。本稿は、その過程で見出した天正十年（一五八二）八月二日付羽柴秀吉書状を中心とした報告である。黒田官兵衛宛の当該書状には、本能寺の変・山崎の戦い後における毛利氏と秀吉方との領土問題についての交渉にあたる安国寺恵瓊の名がみえている。またこの書状は、秀吉が安国寺恵瓊を評した「大ぬる山」という語がみられることも特徴である。

山﨑　真克・麻生　由紀・土居裕美子・迫垣内　裕・頼　祺一

はじめに

平成二十八（二〇一六）年度四月より、比治山大学研究助成を受け、「不動院と安国寺恵瓊に関する研究」を開始した。本研究は、不動院中興の祖とされる安国寺恵瓊に注目し、「不動院文書」の中にみられる恵瓊関係の書状をはじめとした関連資料、および全国に点在する恵瓊関係資料の調査・収集・解読・整理を行うことにより、十六世紀後半における日本の歴史の中で、特に不動院との関わりに焦点を当てつつ、安国寺恵瓊が果たした役割を明らかにすることを最終目的としている。

平成二十八（二〇一六）年度は、資料群の全体像を把握するため、恵瓊関係資料の調査・収集・整理に重点を置き、関連性の高いものから優先して解読作業および考察を行うとともに、基盤となる情報の集積と活用を目指したデータベースシステムの構築を行った。[注1]

平成二十九（二〇一七）年度から令和二（二〇二〇）年度においても引き続き比治山大学研究助成を受け、安国寺恵瓊に関係する資料を網羅的に調査・収集し、構築したデータベースシステムに登録する作業を継続的に行ってきた。

本稿は、こうしたデータベースシステムの構築過程において見出した資料のうち、前稿[注2]と同様に第三者間でやりとりした書状の中に恵瓊の名がみられるものに関する報告である。データベースシステムにおいて「他者の関連」という区分を設けた資料を用いて、毛利氏の使僧として恵瓊の果たした役割について検討する。

一　羽柴秀吉書状（八月二日付）にみられる「安国寺」

『思文閣古書資料目録　第二百六十三号　善本特集　和の史』（令和元年十月）に、次に挙げる羽柴秀吉書状の写真が掲載された。以下に私案による釈文を示す。

48　羽柴秀吉書状　一幅

尚以安国寺大ぬる
山ニ候間先度岡平
迄書状を以申候返事ニ
安国寺被罷上由候
よつて直ニも
我々事明日其
西国表為可相働
地可令帰城候之間
早々納馬候以上
其方ニ被相待候
様ニ可被申候何も
期面之時候之間
不具候恐々謹言
筑前守
八月二日　秀吉（花押）
黒田官兵衛殿

この書状の内容は、名古屋市博物館編『豊臣秀吉文書集　一』永禄八年～天正十一年（吉川弘文館　二〇一五）に、「四七〇　黒田官兵衛宛書状　大阪青山学園」として翻刻紹介されているものと同一である。

尚以安国寺（恵瓊）大ぬる山ニ候間、先度岡平（岡本良勝）迄書状を以申候、
返事ニよつて直ニも西国表為可相働、早々納馬候、以上、
安国寺被罷上由候、我々事、明日其地（播磨国姫路）可令帰城候之間、其方
ニ被相待候様ニ可被申候、何も期面之時候之間、不具候、
恐々謹言、

筑前守
八月二日（天正十年）　秀吉（花押）
黒田官兵衛（孝高）殿
几下

また、同目録には以下のような解説文が付されている。

八月二日付　黒田官兵衛宛
本紙竪13・9糎　横41・1糎
総丈竪106糎　横55・2糎　軸装　箱入

羽柴秀吉の書状。宛先は、秀吉の家臣で、後に筑前福岡藩の藩祖となる黒田官兵衛（孝高、如水）である。年次は天正十年（一五八二）とみられる。内容は以下の通り。

安国寺（恵瓊）がこちらに来るということです。私は明日にそちら（姫路）へ帰城する予定ですので、そこで待っているように安国寺へ伝えてください。詳しいことはお目にかかったときに申しますので省略します。なお、安国寺は大ぬる山（怠惰の意ヵ）であるので、先日、岡平（岡本良勝。当時は織田信孝の家臣だったが、後に秀吉に属した）まで書状を遣わしました。その返事の内容によってはすぐに西国方面へ出兵しますので、早々に馬を納めました。

天正十年に、秀吉と毛利氏との間で勢力範囲をめぐる交渉が行われていた際の史料とみられる。当時、官兵衛は姫路城にあって播磨国の留守居を務めていた。文中にみえる安国寺恵瓊は毛利側における秀吉との交渉役であった。後に秀吉は交渉における彼の働きを評価し、安国寺領を加増している。

このように、黒田官兵衛宛の羽柴秀吉書状の中に、恵瓊を指す「安国寺」という文言がみられる。書状の内容は、ほぼ目録の解説文に述べる通りであると認められる。天正十年（一五八二）六月十三日の山崎合戦で明智光秀を破った後、毛利氏と秀吉方との間で行われていた領土問題についての交渉にあたる目的で恵瓊が活動していたことがうかがえる史料である。

前稿で取り上げた天正十年（一五八二）七月廿三日付の小早川隆景から「蜂須賀小六」（家政）に宛てた書状（名古屋市博物館所蔵）には、山崎合戦の戦勝祝いを述べる使者として「安国寺」（恵瓊）を派遣したことを示す「安

国寺俄被罷上候条相過候」という文言とともに、「然者自輝元為御祝儀重而西堂（恵瓊）被差上候間」という文言が記されていた。「蜂須賀小六」（家政）に対し領土問題の取りなしを依頼したこの書状と同様に、当該書状からも恵瓊が毛利氏と秀吉方との間を行き来する様子がみてとれる。

藤井譲治編『織豊期主要人物居所集成』〔第2版〕（思文閣出版　二〇一七）では、天正十年（一五八二）八月四日付の不彦宛書状（「今村文書」東大史影写）「我等も昨夕三日、播州姫路迄令帰城候、然者西国之儀、是又弥無異儀候」（名古屋市博物館編『豊臣秀吉文書集　一』）という記述を根拠に、秀吉は八月三日に丹波亀山より姫路に到着したとする。[注3] 八月二日付当該書状の「明日其地可令帰城候之間」という記述とも合致しており、秀吉の居所を解明する上でも有力な情報を加えることができる。

二　「大ぬる山」という評価

当該書状の余白・行間に記された「尚以」以降の部分において、秀吉は恵瓊を「大ぬる山」と評し、そのため織田信孝に仕える「岡平」（岡本平吉郎良勝）[注4] に書状を遣わしたとする。「大ぬる山」は、目録の解説文に「怠惰の意ヵ」とあるように、否定的な意味を有する人物評と思われるが、具体的に恵瓊のどのような面を指しているのかは判然としない。毛利氏と秀吉方との間で行われていた交渉過程に何からの原因が見出せると思われるので、岡本良勝が果たした役割とともに、今後の検討課題とする。

ここでは、「大ぬる山」という語の用法を確認するため、管見に入った範囲でこの評価が用いられた例を挙げる。

①牧村兵部宛千利休書状

けさのゆきに御尋なき事
さりとては大ぬる山にて候納裳の
くり出ならば道理に候
かしく
利休
十三日　（花押）
牧兵様
人々御中[注5]

②『三浦家文書』（年月日未詳）

一二一　毛利輝元自筆書状（折紙）
たか（藤）景もわつらいにて候つる、かやうなるおかしき事候ハす候〳〵、かしく、
其方事気分悪之由候、我々も二三日かいき候、各一人ももれなく煩候、はやよく候、やかて可罷下候、其方人数、高麗へり三百之辻、堅固申付、各同前可渡候、少も不可有緩候、件大ぬる山にては、弥不及是非事候、三月一日ニ於下関着到ニ付候様ニと、各申ふれ候、可得其心候〳〵、かしく、
三兵（元忠）[注6]

③『常山紀談』巻之三

62信長越前に攻入時、朝倉義景二万計の兵にて刀根山といふ大山に陣どり、麓に信長の先陣ひかへ居たり。ある日信長井楼に上り敵を見わた

し、「敵は今夜必引退くべし。先陣の者共なおこたりそ」と使を度々やりて下知せらる。是を聞て、「殿はいかでかくは仰候やらん。敵大軍にて山に拠り地の利を得て且主戦なれば、何条引退べき」とあやしみけり。夜に入ても信長は猶井楼に在て、敵陣を睨で目もはなたずして有しが、丑の刻ばかりに、「すはや敵はひくぞ」といふほどこそあれ、螺ふきたてさせ馬に乗、「先陣の大ぬる山のやつばらがゆだんしたるに、旗本の者ども功名せよ」とて真一文字にすゝまれしが、果して先陣はおくれて、信長の旗本にて勝利を得られけり。信長常に、おこたる者を大ぬる山とてわらはれしとぞ。

〔巻三の二十八〈第六十二話〉信長公、朝倉を撃給ひし事〔注7〕〕

④『近古史談』巻一　織篇第一

大緩山

信長動罵レ人曰二大緩山一。猶レ言二懶惰輩一也。（或云、大緩山江州山名、信長蓋借以目二此輩一也。）天正元年八月、信長攻二越前一。朝倉義景擁二三万騎一、陣二於刀根山一。我前軍進陣二其麓一、相持未レ戦也。一日信長登二営楼一、候二敵動止一曰、「今夜敵必退矣。宜下乗二其撤レ陣、尾撃殲上之。」屢戒二前軍一勿レ惰。諸将士皆笑曰、「主将何所見。夫敵以レ主待レ客、且拠二要害一布レ陣、得二地之利一矣。安有二不レ戦而退之理一。」

日已暮。信長猶在二楼上一、張レ目不レ動。夜漏已丑刻、敵中火揚矣。信長急下レ令、吹二海螺一、進二旗鼓一、罵曰、「咄、大緩山。果不レ及レ事。我且以二麾下一撃レ之。」与二左右五十騎一馳、直前衝レ敵。敵軍擾乱、無二復闘志一、皆争レ先而遁。我軍追撃、遂得二大捷一。凡信長見レ機而動、神速不レ誤レ事者、率皆此類。〈後略〉〔注8〕

千利休および毛利輝元の書状にみられる使用例に加えて、成立時期が下る文献ではあるものの、織田信長の使用例が見出せた。〔注9〕毛利輝元の使用例では、直前に「少も不可有緩候」とあることから、心に緩みのある者を指して否定的に用いていることがわかる。『近古史談』では、人を罵って「懶惰輩」と言うようなものだとする。それぞれの用例の背景や、具体的に誰のどのような面に対して用いられているかなどの考察を、今後の課題として行う必要がある。

おわりに

本稿では、安国寺恵瓊関係資料データベースシステムの構築過程において見出した資料のうち、特に第三者間でやりとりした書状の中に恵瓊の名がみられるものに関して述べてきた。間接的ではあるが、天正十年（一五八二）備中高松城講和以後の毛利氏と秀吉方との領土問題について、恵瓊が交渉にあたる役割を果たしている様相をうかがうことができた。また、今回取り上げた天正十年（一五八二）八月二日付の羽柴秀吉書状には、織田信長以来の使用がみられる「大ぬる山」という人物評が含まれている。人物の性向を示す俗語的な表現として注目することができる。

今後も、安国寺恵瓊自筆資料のみならず、今回対象としたような第三者間でやりとりした書状などをも視野に入れ、網羅的に恵瓊関係資料の調査・収集・整理を継続する。資料の収集にあたっては、既に公開されている各種データベースを手がかりとしつつ、新出資料も含めて幅広く情報を

入手する必要がある。最終的に有効なデータベース活用方法を確立することを念頭に置きながら、引き続き本研究を進めていきたい。

〔注〕

1　山﨑真克・麻生由紀・土居裕美子・迫垣内裕・頼祺一「安国寺恵瓊関係資料データベースシステムの構築とその活用について」（『比治山大学紀要』第二十三号　二〇一七）

2　山﨑真克・麻生由紀・土居裕美子・迫垣内裕・頼祺一「天正十一年小早川隆景・羽柴秀吉書状にみられる安国寺恵瓊―安国寺恵瓊関係資料データベース資料稿（一）―」（『比治山大学紀要』第二十四号　二〇一八）

3　『織豊期主要人物居所集成』〔第2版〕（思文閣出版　二〇一七）では、「4日付石彦宛秀吉書状」とする。

4　「岡本平吉郎良勝」は、『戦国人名辞典』（吉川弘文館　二〇〇六）に「岡本重政」、谷口克広『織田信長家臣人名辞典』第2版（吉川弘文館　二〇一〇）に「岡本良勝」として掲出される。また、名古屋市博物館編『豊臣秀吉文書集　一』永禄八年～天正十一年（吉川弘文館　二〇一五）には、天正十年（一五八二）六月五日付の「四二三　岡本平吉郎宛書状」（「長井喜平氏所蔵文書」東大史影写）が収載されている。

5　鈴木半茶「大ぬる山の文」（『日本美術工芸』一三七　一九五〇）収載の写真・翻刻に拠る。同書状は松平乗邑編『三冊名物集』に収載されている。

6　東京大学史料編纂所「古文書フルテキストデータベース」『大日本古文書　家わけ文書』に拠る。

7　製版本『常山紀談』（菊池真一氏蔵）を底本とする菊池真一編『常山紀談　本文篇』（和泉書院　一九九二）に拠る。なお、大津雄一・田口寛訳注『戦国武将逸話集　訳注『常山紀談』巻一～七』（勉誠出版　二〇一八）では、「「大ぬる山」（大変手ぬるい、との造語。山は調子を添える語）」とする。

8　『近古史談』（大槻清崇著、元治元年刊）を底本とする若林力『近古史談全注釈』（大修館書店　二〇〇一）に拠る。

9　『時代別国語大辞典　室町時代編一』には、「おおぬるもの［大ぬる者］の項目に「行動や決断が非常にのろくて、間の抜けた者。人を罵っていう語。」という記述があり、用例として「彼大ヌル（ヲホ）者ノ浅井ガ所存ニテハ、両条何モヤハ請候ベシ」（信長記下）〔著小瀬甫庵　底寛永元年版本〕が挙げられるが、未見である。

〔付記〕本稿は、平成二十九（二〇一七）年度～令和二（二〇二〇）年度比治山大学研究助成「不動院と安国寺恵瓊に関する研究」による研究成果の一部である。

〈キーワード〉不動院、安国寺恵瓊、データベース、羽柴秀吉、大ぬる山

山﨑　真克（現代文化学部言語文化学科日本語文化コース）
麻生　由紀（不動院（比治山大学大学院現代文化研究科現代文化専攻日本地域文化研究修了））
土居裕美子（鳥取看護大学看護学部看護学科）
迫垣内　裕（比治山大学短期大学部名誉教授）
頼　祺一（広島大学名誉教授　比治山大学名誉教授　頼山陽史跡資料館館長）

（二〇二〇年十月三十日　受理）